

平成 2 2 年度
広島市教育センター

小学校英語科における 「ことばについての知的な気付き」を促す15分授業の工夫

広島市立安東小学校教諭

西川由紀

「ひろしま型カリキュラム小学校英語科」は、45分授業と15分の帯授業（以下、15分授業）があり、15分授業は、「英単語に慣れ親しむ学習」と「英単語の仕組みに気付く学習」から成る。しかし、15分授業は、英単語を「聞くこと・発音すること」で終わってしまうことが多く、「英単語の仕組みに気付く」学習が十分にできていない実情がある。本市は、英語科で「ことばのネットワークづくり」を進めることをねらいとしており、「ことばについての知的な気付き」（以下、「気付き」）を大切にする指導を重視している。それは、15分授業の「英単語の仕組みに気付く」学習とも深く関連している。そこで、本研究では、「気付き」を促すための具体的な15分授業の工夫を考え、それらの有効性について探究した。

その結果、指導者が授業でねらう「気付き」を具体的に意識したり、発問や指示を工夫したりして、学習活動を進めることで、児童が多岐に渡る「気付き」をもつことができることが明らかになった。

キーワード：ひろしま型カリキュラム、小学校英語科15分授業、ことば
についての知的な気付き

I 問題の所在

広島市の小・中学校では、平成22年度より、広島市独自の教育課程である「ひろしま型カリキュラム」が全面施行された。

所属校では、平成19年度より、ひろしま型カリキュラム小学校英語科の研究協力校として、施行より早く英語科が始まり、平成22年度までの3年間で、様々な成果と課題が挙げられた。

教師側においては、45分授業では、ティームティーチング制により英語を話すことができるAIE（英語指導アシスタント）の存在や、詳細且つ、パターン化された学習指導資料集があることで、初めてでも英語科の学習指導をすることができる、また、45分授業の主な学習活動であるコミュニケーション活動は、児童も大変盛り上がり、学級づくりにも生かせるという肯定的な意見が挙げられた。また、多くの児童は、英語科の45分授業を楽しんでいると評価し、学習した英会話を家庭で披露したり、外国の人と話してみたいと意欲を見せたりするなど、大変意欲的な面を見せた。

しかし、教師側から、45分授業のコミュニケーション活動を円滑に進めるためには、15分授業で英単語にしっかり慣れさせておかないといけない。15分授業では「英単語に慣れ親しませる」学習の他に「英単語の仕組みに気付く」学習もすることになっているが、音声を聞かせて、発音し、カルタなどのゲームをする「英単語に慣れ親しませる」学習だけで時間は終わってしまう。さらに「英単語の仕組みに気付く」学習とは、どう指導し、児童にどのような力をつける学習なのかよく分からないという意見が出てきた。児童の中にも、英単語の習得に不安を感じたり、パターン化されている学習活動に少し飽きてきたという声も出てきたりするなどの課題も見えてきた。

II 研究の目的

ひろしま型カリキュラム小学校英語科は、英単

語に慣れ親しませながら、「ことばについての知的な気付き」を大切にする指導を重視し、ことばのネットワークづくりを進めることをねらいとしている。この「ことばについての知的な気付き」が、15分授業の「英単語の仕組みに気付く」学習につながると捉えた。それを促す授業の工夫をすることが、教師側の課題「15分授業でつけるべき具体的な力の不明確さ」やそれに伴う「学習指導に対する不安」、児童がもつ「英単語習得への不安」や「パターン化した学習活動に対する学習意欲の低下」の解決の手だてになると考えた。

そこで、「ことばについての知的な気付き」を促す15分授業の具体的な工夫を研究していくこととした。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究仮説の設定
- 3 研究授業の計画・構想
- 4 研究授業と結果の分析・考察

IV 研究の内容

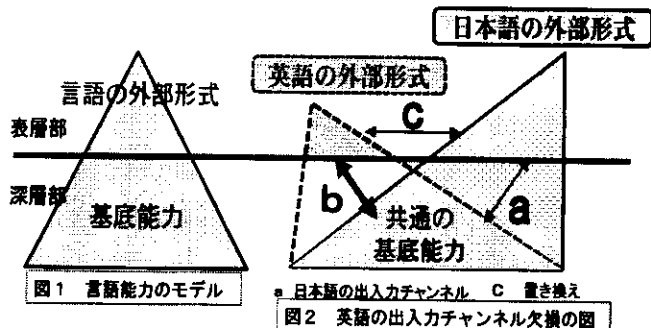
1 研究主題に関する基礎的研究

- (1) ひろしま型カリキュラム小学校英語科について
ひろしま型カリキュラム小学校英語科の目標は、「言語や文化に対する興味・関心を高め、聞いた話したりする力の基礎を養い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」という三つの柱からできている。この目標を達成できるように、授業時間を週3回の15分授業と週1回の45分授業の年間70時間と設定するとともに、小学校の2年間で扱う英単語数を500語とした。この500語も児童の身近にあることばを中心として専門家によって精選、配列されたものとなっている。

『小学校英語科授業指導資料集』によると、英語科のねらいは、場面に応じて自分のことばで表

現できる力の基盤を培うことであり、そのために、英単語に慣れ親しませながら、単語レベルにおける「ことばについての知的な気付き」を大切にする指導を重視し、ことばのネットワークづくりを進めることを目指している。

(2)「ことばのネットワークづくり」と「ことばについての知的な気付き」について



(出展 山田雄一郎 ほか 『「英語が使える日本人」は育つのか?』)

広島修道大学の山田雄一郎氏によれば、人は、経験や知識としてためた能力「基底能力」を使って、言語を発したり、聞いたことを理解したりしているという。私たちは、思いや考えを今までの知識や積み重ねてきた経験をベースに、言語として組み立て、日本語を話している(言語の外部形式)。その組み立てる力がaの部分である。では、英語を発する時は、どうだろうか。多くの日本人は、日本語から置き換えて英語を話していると考えられる。これでは、水面に浮かんだ氷の島のごとく、支えているものがないために消えてしまう。これが英語が身に付かない要因であると山田氏は述べている。英語を使う際にも、日本語と同じように私達も持っている基底能力を使うこと、そのためには、ことばを組み立てるbの力をしっかり育てていくことが大切だとしている。bの「ことばを組み立てる力」=「ことばの力(言語能力)を育てること」が、英語が使えるようになるためには必要なのである。

では、「ことばの力(言語能力)を育てる」とは、具体的にはどういうことなのか。慶應義塾大学の天津由紀雄氏は、ことばへの気付きを育成することでことばの力をはぐくむ教育の試みについて提言されている。

ことばへの気付きを育成することは、ことばの使用の創造性(ことばに対する新たな発見やことばのつながりなど)に直結し、結果として、ことばの世界を広げ、より豊かな言語生活を送ることを可能にする働きがあるとしている。このようなことばを通しての思考やものの見方の広がりを大津氏と対談した山田氏は「ことばのネットワークづくり」と述べている。

これらのことから考えると、「場面に応じて自分のことばで表現できる力の基盤を培う」というひろしま型カリキュラム小学校英語科のねらいにおいて、「ことばについての知的な気付き(以下、「気付き」)を大切にする指導を重視し、ことばのネットワークづくりを進める」という根拠が見えてくる。

2 研究仮説の設定

英語科15分授業で、【歴史】、【発見】、【連想】、【創造】の活動カテゴリーのねらいに応じた発問や学習活動を工夫すれば、「気付き」をたくさんもち、意欲的に学習活動に取り組む児童が増えるだろう。

3 研究授業の計画・構想

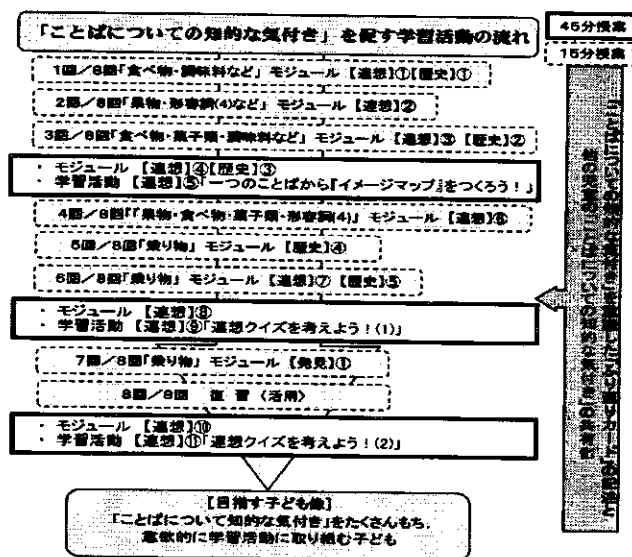


図3 研究授業の構想図

図3より、1回目の15分授業で得た「気付き」が次の15分授業につながっていくように、また

45分授業にも活用されるように、学びの連続性を考慮して、学習を進めていく。

4 研究授業と結果の分析・考察

(1) 研究授業のねらい

児童が「気付き」をもち、意欲的に学習活動に取り組むための手だてを探る。

(2) 研究授業の対象と分析材料

ア 対象 広島市立A小学校第5学年29名

イ 教材 1月の15分授業 全8回

45分授業 全4時間中3時間

ウ 分析材料 「ふり返りカード」(15分授業)、授業の様子(VTR)

(3) ねらい達成のための手だて

ア 15分授業と45分授業の学習活動を関連させた単元指導計画の作成(表2 参照)

イ 「気付き」につながる学習活動の工夫

(ア) 活動カテゴリー【歴史】、【発見】、【連想】の学習活動を増やしたり、移行させたりする。

表1 学習活動の変更と移行

回	現行の学習活動	変更した学習活動
1	【連想】	【連想】・【歴史】
2	【連想】	【連想】
3	ゲーム	【連想】・【歴史】
4	ゲーム	【連想】
5	【歴史】【発見】	【歴史】
6	ゲーム	【連想】・【歴史】
7	ゲーム	【発見】

(イ) ねらいに沿った具体的な発問や指示を考える。

〈現行の指導資料集での記述〉学習活動【発見】

○ 乗り物の単語のできかた(組み立て)を知る。

・ 単語が組み合わさって、新しい単語ができることを知る。

発問や指示は、記述されていない。

指示の工夫

「次の二つのことばをよく聞いて、共通していることを見つけてみましょう。目を閉じましょう。」

‘street car’ ‘police car’

発問の工夫① 「他にもことばとことばが組み合わさってできたのかなと思うものはないですか？」

fire(火)+ engine(機関)=(消防車)など

発問の工夫② 「日本語にもないかな？」

紙飛行機=紙+飛行機

(paper + plane)

(ウ) 15分授業と関連している学習活動を45分授業の学習活動「ウォーミングアップ」に取り入れる。

〈現行のウォーミングアップ〉

「歌♪The ABC Song」 CDを聞き、歌う。

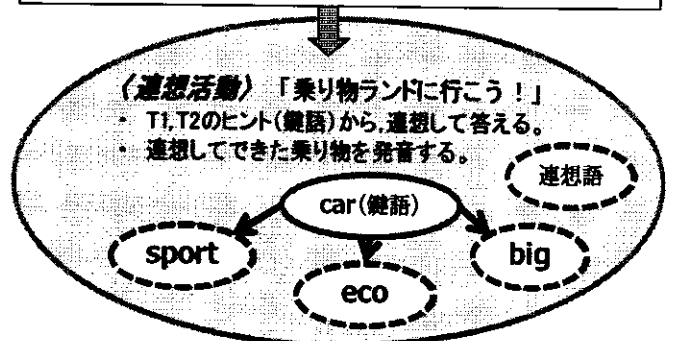


図4 45分授業ウォーミングアップの工夫

(イ) 授業でねらう「ことばについての知的な気付き」の具体の明確化

指導者がねらう気付きを意識する、授業のイメージをもつことで、児童の反応に応じた発問やゆさぶり、言葉がけができ、「ことばについての知的な気付き」を促すことができると考えた。

〈ねらう「ことばについての知的な気付き」例〉

- ・ いろいろな連想の仕方がある。(仲間連想、統語的連想など。)
- ・ 連想したことばとことばをつなげると、それをくわしく表すことばができる。
- ・ 習っていない英語でも、今まで習ったものを組合わせて似た意味のことばをつくることができる。

(ウ) 45分授業の「ふり返りカード」の設問の工夫

児童が無意識に行っている「気付き」を意識化できるように気付きを具体化した設問を入れた。

〈現行の「ふり返りカード」の記述〉

- 1 連想クイズを楽しみましたか。
- 2 今日の学習で分かったことや気付いたこと、疑問に思ったことを書きましょう。

1 楽しみながら、ことばを連想するチェンゲームやクイズづくりができましたか。

2 あなたはどのようにしてことばを連想しましたか。次の中から選んで、()に○をしてください。いくつ選んでもいいです。

()「パンダ→白黒、くまににている」のように、そのものの見た目から連想した。

()「パンダ→中国生まれ、ササを食べる」のようにそのものの特ちょうや性しつから連想した。

()「大きいパンダ、白黒パンダ」のようにそのものをくわしく表したり、ことばとことばをつなげたりして連想した。

3 今日の連想の学習で気付いたことや思ったことを書きましょう。

表2 15分授業を含めた単元の指導と評価の計画

目標・主な学習活動	評価		評価方法
	【ア】	【イ】	
1課/8回「食べ物・動物など」モジュール【連想①】【歴史①】			
2課/8回「動物・動物園など」モジュール【連想②】			
3課/8回「食べ物・動物園・動物など」モジュール【連想③】【歴史②】			
「ことばのイメージ」 ○ 一つのことば(動物)から、他のことばをたくさん連想することができるようにする。 モジュール【連想④】【歴史③】 ・ 動物から、ことばを連想する。(イメージカルタ) ・ 家で静かしながら、ことばを連想してイメージマップをつくる。(イメージマップづくり)	○	○	行動観察 ふり返りカード
4課/8回「動物・食べ物・動物園・動物園(4)」モジュール【連想⑤】			
5課/8回「乗り物」モジュール【歴史④】			
6課/8回「乗り物」モジュール【連想⑥】【歴史⑤】			
「わたしはだれ？」 ○ 楽しみながら、連想クイズに答えたり、ことばを連想してクイズをつくらうことができるようにする。 モジュール【連想⑦】 ・ 3ヒントを開いてクイズに答える。(連想クイズ) ・ 3ヒントのクイズをつくる。(連想クイズづくり①)	○	○	行動観察 ワークシート ふり返りカード
7課/8回「乗り物」モジュール【歴史⑥】			
8課/8回 復習			
「連想クイズ」 ○ 楽しみながら、連想クイズに答えたり、ことばを連想してクイズをつくらうことができるようにする。 モジュール【連想⑧】 ・ ことばを連想してつないでいく。(連想チェンゲーム) ・ 3ヒントのクイズをつくる。(連想クイズづくり②)	○	○	行動観察 ワークシート ふり返りカード
「連想クイズ大会」 ○ クイズの発表会を通して、友だちのヒントのことばを聞き取ろうとしたり、クイズを発表したりすることができるようにする。 クイズに答えたり、クイズを発表したりする。(連想クイズ大会)	○	○	行動観察 ふり返りカード

(4) 分析の方向と方法

ア 「ふり返りカード」より、「気付き」を抽出し、量の変容を見る。

イ 「ふり返りカード」より、「気付き」を抽出し、質の変容を見る。

(5) 研究の結果と考察

ア 「気付き」の量からみる結果と考察

図5は、8回あった15分授業の児童の「ふり返りカード」から、「気付き」のみを拾い上げ、数値化したものである。

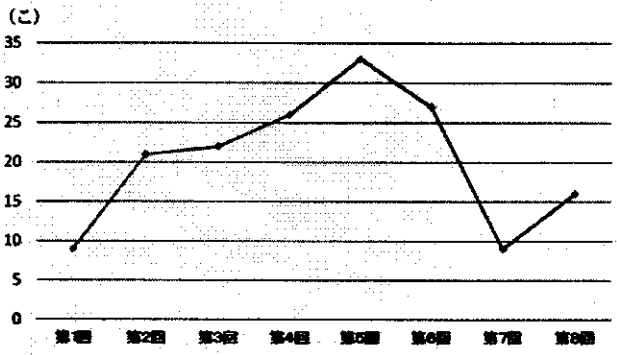


図5 「ことばについての知的な気づき」の量の推移

第1回から、回を重ねる毎に気づきの数が増加してきている。第7回は下がっているが、これは連想クイズの後に、外国の文化を紹介したところ、そのことについての感想が多く、驚きの方が大きかったと考える。

第1回の10個にも満たない「気づき」の数の少なさは、連想活動の導入学習でゲームの楽しさばかりが先に立ってしまったこと、指導者の「気づき」を意識した指導が少なかったこと、また児童も「気づき」のイメージがもてなかったことが原因と考えた。

そこで、第2回からは、指導者がねらう「気づき」を意識してゆきぶりや言葉がけをしたり、児童のねらいに沿った「気づき」を紹介したりしたことが奏功し、増加したと考えられる。

イ 「気づき」の質からみる結果と考察

児童の「気づき」を表3のように4つに分類した。

表3 「ことばについての知的な気づき」の分類表

発音に由来したもの	①日英の音声の違い ②日英のことばの成り立ち
-----------	---------------------------

ことばの仕組みに係るもの	③日英の語順
	④ことばの広がり

「発音に由来したもの」を図6に表した。発音についての気付きは、児童が気付きやすい「気付き」の一つであり、図中の丸印のような「lemonとmelonの語尾の発音は難しい」という気付きは、これまでの45分授業の「ふり返りカード」でもよく記述していた。しかし、授業回数を重ねる毎に、四角印のような英語と日本語を比較した気付きや、「ポリスカーは、警察の車？ストリートカーは街の車？」のように、自分たちのもっている知識や経験から思考する「日英のことばの成り立ち」についての「気付き」ももつようになってきた。

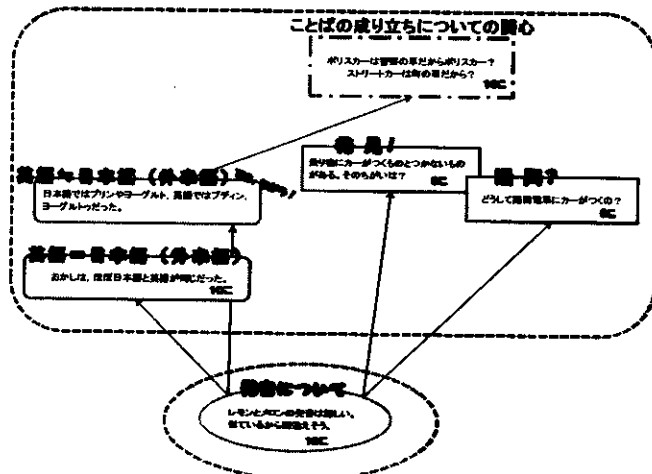


図6 発音に由来した「ことばについての知的な気付き」

このような発音に由来した「気付き」が多く見られたのは、第5回である。(図7)しかし、第5回は、ことばの仕組みに係る「気付き」が少ない。

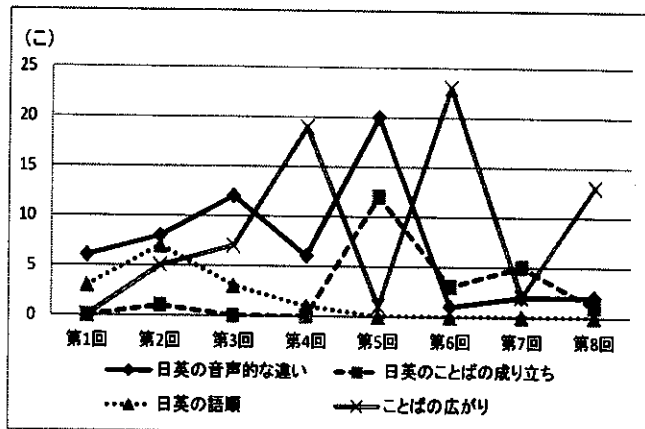


図7 質からみる「ことばについての知的な気付き」の量の推移

ことばの仕組みに係る「気付き」が多いのは、

第4回と第6回である。特に「ことばの広がり」に関する気付きが高い。気付きの内容を図8にまとめる。

研究授業の主な学習活動は、連想活動だった。「sweetからstrawberryを連想し、sweet strawberryとつなげると、とてもあまいいちごという意味になる。英語も日本語と同じように組み合わせることができる」と発見した気付きや、「ことばとことばが合わさっている英単語は、ドラゴンフライのように虫でもあった」と既習の学習を想起しての気付き、「今まで習った英語は、生活の中で連想できる」と生活と結び付けた気付きを記述する児童も出てきた。

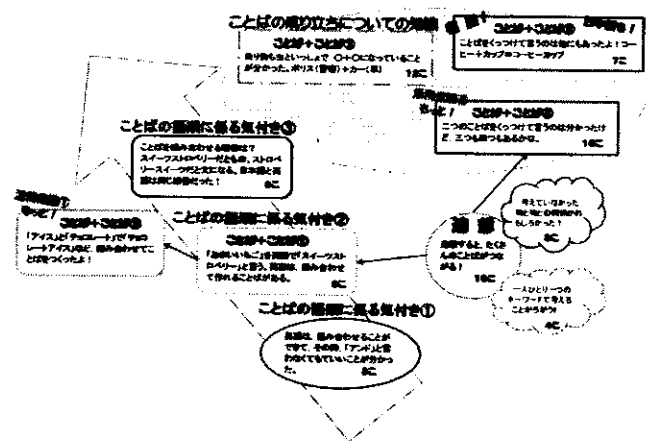


図8 ことばの仕組みに係る「ことばについての知的な気付き」

また、ことばをつなげて自分の伝えたいことばを楽しく表現するなど、学習したことを活用する児童も多く見られるようになってきた。

これらの「気付き」の質の広がりや、他の児童の「気付き」が紹介されたことで、ふり返りの視点が得られ、記述内容に変化が起きたとも考えられるが、手だての中の「気付き」を促すために工夫した15分授業、45分授業の連続した学習活動に児童が慣れ、「ことば」について探究する学習意欲が促進されてきたことも大きな要因であると考えられる。だからこそ、既習したことを活用したいという意欲も生まれたのだろう。

V 研究のまとめ

本研究では、「ことばについての知的な気付き」を促すための具体的な15分授業の工夫を考え、それらの有効性を探究した。

その結果、次のような成果と課題が得られた。

1 研究の成果

- 単元指導計画を整理し直すことで、指導者が15分授業と45分授業の関連性についてより意識することができ、そのことで各授業のねらいが一層明確化されることが判明した。
- 指導者が授業でねらう「気付き」を具体的に意識しておくことが必要であり、それが不十分であると授業のねらいに迫れないことが再確認された。
- 児童に「気付き」をもたせるためには「発問・指示」が大切である。現行の指導資料集に発問・指示を具体的に掲載すべきであることが判明した。
- 今回、45分授業のウォーミングアップに15分授業と関連した学習活動を組み込んだ。このことで、児童は、約1か月間の授業につながりを感じながら臨めたのではないかと考える。
- 「気付き」を意識させるためには、児童が興味を示すゲーム活動を減らしてでも「気付き」に特化した学習活動を増やすことが有効であろうことが判明した。

今回の研究で、最も強く印象に残ったことは、思考をとまなうレベルの高い学習だったのにも関わらず、児童は大変興味をもち、意欲的に臨んでいたということである。「連想するとたくさんのことばがつながっておもしろい、発見できるから楽しい」「いつもの英語とちがう15分授業をすごく楽しみにしていた」とふり返りカードに書いている児童がいた。

児童自身も「覚える英語科の授業」ではなく、知的な探求のある「思考する英語科の授業」を望んでいるのかもしれない。

2 研究の課題

- 上述のように、具体的な手だてを講じたこ

とにより、児童に「気付き」を促す授業を連続して行うことができた一方で、手だての一つ一つの有効性について科学的に検証できていない状況である。

- 「気付き」について、特定の学年で、特定の単元を例として研究を進め、一定の成果を得た。この成果は、他学年や他の単元でも有効であろうと推察されるが、その実際については、今後、引き続き研究を行うことで検証する必要がある。
- 本研究の成果は、現行で実施されていない15分授業におけるふり返りの実施に負うところが大きい。現行の学習指導案で同様の成果を得ることは難しい。今後、15分授業の学習指導案の改訂があるならば、ふり返りの実施も含めて全市的に再検討する必要がある。

以上のように、本研究では、「ことばについての知的な気付き」を促すための具体的な15分授業の工夫についての成果と課題を整理するとともに、今後の英語科学習指導の充実に向けた視点を獲得することができた。これらの結果を生かしながら、今後も、小学校英語科の更なる充実・改善に取り組んでいきたいと考える。

参考文献

- ① 大津由紀雄・窪菌晴夫『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会、2008年
- ② 広島市教育委員会『英語科5・6年15分授業指導資料集』
- ③ 広島市教育委員会『英語科5・6年45分授業指導資料集』、2010年
- ④ 山田雄一郎『英語力とは何か』大修館書店、2006年
- ⑤ 山田雄一郎・大津由紀雄・斉藤兆史『「英語が使える日本人」は育つのか』岩波書店、2009年